母親のふりシグナルに対する乳幼児の反応の発達的変化

石橋　日南子

【背景と目的】ふり遊びは表象機能の発達を示すものとして注目されており、子どもの発達にも影響がもたらされていると言われている。また、子どものふりの産出に大人の存在が重要な役割を果たしていると先行研究からも指摘されているが、その一つに大人が示す「ふりシグナル」がある。ふりシグナルとは、ふり行為に付随する笑顔やアイコンタクト、効果音の多用などの様々なシグナルのことをいうが、その実証的研究は不十分である。そこで本研究では、大人との相互交渉において子どものふりの表出や理解がどのように支えられているのかを研究した。

【方法】本研究は母子 16 組を対象として行われ、18 ヶ月群、24 ヶ月群、30 ヶ月群、36 ヶ月以降群に分けられた。主に大学内のプレイルームで約 1 時間半構造化場面での行動観察が行われた。ふり遊び課題では、ふり遊び条件(何もなし場面)、そこにお茶とお菓子を加えた現実条件(おかし場面)に加えて、おもちゃのクッキーを加えたふり遊び条件(おもちゃ場面)の三条件を設定した。各条件 3 分間行動を観察し、母親と子どもの行動の生起率を算出した。また、子どもの社会的能力の指標として象徴遊び課題（SPT）による象徴遊び能力、共同注意得点（JA 得点）を用いた。

【結果と考察】①母親のふりシグナル：母親はふり遊び場面においてふりシグナルを発しており、18，24 か月齢の幼児においても多く表出されていた。子どものふり行動は 18，24 カ月齢でも多く観察されたが、月齢が高くなるほど微笑み、非言語やオノマトペなどの発話も多く見られた。18，24 ヶ月の子どもにとって、母親のふりシグナルはふりと現実の区別を示すことはできないものの、子どものふり行動を促すことに役立っており、子どもが 30，36 か月齢以降になると母親のふりシグナルの表出が目立たなくなってもふりと現実を理解し、主体的にふり遊びをするようになるといえよう。②ふり遊びとおもちゃ：おもちゃの存在はふり遊びがより促されるというわけではなく、おもちゃがあるとそれ自身の特性を生かしたふり行動が頻発されるようになるが、何もない場合では想像力を生かした他のふり行動も見られるようになり、より母子がお互いの行動・反応に注目をするようになることが示唆される。③表象遊び能力とふり遊び：表象遊びを豊かにできるようになるほど、ふり遊びをする際に、より一層相手の行動を見ようとする傾向にあった。表象遊びが豊かにできるようになると、オノマトペの発話を通して対象物の状態を説明できるようになるといえる。④共同注意行動とふり遊び：特におもちゃの介在するふり遊び場面では共同注意得点が高いほど子どものふり行動は多くなり、母親のふりシグナルは少なくなることが分かった。共同注意行動が成熟するほど、母親がオノマトペやふり行動などのふりシグナルをあまり発しなくなるが、子どものふり行動には影響されないようだ。⑤ふりと現実の区別を理解できない段階だからこそ、母親が積極的にふりシグナルを発することで子どものふりが促され、その中で社会性が育まれながら他者の視点を自然と身につけるようになり、心の理論における他者理解などにつながっていく。ふり遊びはその点において社会性を自分の中に取り入れていく第一歩であり、発達的に重要なステップであるといえる。（比較発達心理学）